

派遣報告書

派遣者氏名 廣田郷士（博士前期課程）

派遣先 パリ第八大学

派遣期間 2012年3月1日～同年9月30日（7ヶ月）

研究テーマ エドゥアール・グリッサン初期評論作品における世界認識

派遣概要及びその成果について

報告者は、上記期間中の派遣において、主に以下の二点を軸に研究を進めた。まず第一に、目下の修士論文の課題である「エドゥアールグリッサン初期評論作品における世界認識」を進めることであり、この課題が滞在中の何より最優先の課題であった。そして第二に、報告者の専門とするフランス地域研究、特にパリの論壇におけるカリブ海出身者の文学の研究であり、こちらはより長期的視野に立った副次的課題である。

第一の課題のために、報告者はパリ第八大学フランス文学科のフランソワ・ヌーデルマン教授に指導を仰ぎ、研究上の助言を得ながら、同教授の授業、及び同教授が企画しパリ第八大学と共同で運営され、毎回グリッサン研究者による発表が行われる「全-世界学院」の連続セミナー、さらに他機関で開催されるセミナーや学術的催しに継続的に参加した。同時に必要資料の収集と読解を行い、論文の執筆を進めて来た。ヌーデルマン教授からは、初期の評論作品を検討する上では当時の論壇的・思想的な文脈を踏まえる重要性を助言頂くなど、研究上大きな示唆とご支援を頂いた。また9月には、グリッサン、ペルス、セゼールをめぐる国際シンポジウムにも参加し、グリッサン研究の最新動向を知ると同時に、多くのグリッサン研究者とも交流し、研究上の意見の交換をすることができた。

これらの活動を通して、やはり日本国内にいては触れることのできないグリッサンの最新の研究動向に触れることができた点は目下の研究のための大きな成果であった。このことはシンポジウムやセミナーに関してのみならず、入手できた資料に関するものも言うことができる。アラン・メニルやサミア・カッサブ・シャルフィの研究、近年の雑誌のグリッサン特集号など、国内外を問わずまだ先行研究として消化され始めたばかりの研究書を多数入手し、滞在中にその読解を進めることができた。また、グリッサンの初期評論作品に繋がる、1950年代から60年代にかけて雑誌『レ・レットル・ヌーヴェル』や『エスプリ』などに掲載された当時のグリッサンの多くの文芸批評記事、さらに詩集『血の釘付け』初版、グリッサンによる編集の雑誌『アコマ』などを入手できたのも、本研究上極めて大きな成果であった。これらの成果をもととし、2013年1

月に東京外国語大学に提出予定の修士論文へと、具体的成果として結実させる予定である。

また第二の課題に関して取り組んだ活動も、やはり学術的催しへの参加と資料の収集である。派遣先のパリ第8大学では、広くフランス語圏の文学に関する講義も開講されており、こちらへの継続的な参加をする一方、カリブ出身者による文学動向を調査し、資料を収集した。カリブ出身者による文学に関する研究は日本国内ではまだ端緒についたばかりであることも考え、この点での資料は現物での収集を心がけた。具体的にはルネ・マランの小説『バトゥアラ』の1921年の初版、エリ・ステファンソンの処女詩集『叩き売りの国のための一矢』、ジョゼフ・ゾベルの小説二作目『パリの祭り』初版など、多くは国内の図書館・研究機関には所蔵していない資料である。この成果は、博士前期課程在籍中の報告者にとっては、研究の長期的視野での大きなアドヴァンテージとなったのみならず、日本国内におけるカリブ文学研究の進展にとっての貢献となるとも考えている。

今後の課題について

先述のとおり、本滞在の成果をもとに、2013年提出予定の修士論文へとその成果を結実させることが、喫緊の課題である。本滞在中の研究活動を通して、グローバル世界に対するビジョンを早い段階から構想しているなど、グリッサンのキャリアの初期の時期における活動と思想形成について、より明確に追うことが出来た。未だ多くがヴェールに包まれているグリッサンの思想の別様の側面を、現在執筆中の修士論文中で明らかにすることを、まず何より急ぎたい。

さらに、今後はグリッサン研究をより広い視野から継続していくつもりである。サン・ジョン・ペルス、エメ・セゼールら他の大詩人との関連からグリッサンを論じることがグリッサン研究では不可欠の視点であり、さらに言えば〈アンティューユ文学〉という企ての歴史、その通時的視点からグリッサンを論じて行くことが、今後の研究の大きな方向性である。

その上でまた今回の滞在中に得ることのできた知見を、今後は研究会や学会報告などで広く精力的に公開していくことが、報告者の使命と課題であると考えている。さらなる研究活動に引き続き邁進していく次第である。